
大海賊時代に来た死神

死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大海賊時代に来た死神

【NZコード】

N4503Y

【作者名】

死神

【あらすじ】

現世で寝てしまつた死神零番隊長。起きたら何故か大海賊時代のONE PIECEの世界に居た。その主人公（死神）が海軍に入つて頑張る話。

1 あれ? これは何ですか? (前書き)

作者が書いてる2作品と同じ名前ですが、設定は同じですが、話と繋がってません。

1 あれ? ジーはなぜですか?

「ジーは、海軍本部の医療施設の一室。

「う・・・? ? ? ? なんでだ?」

疑問を持つていると、

ガチャ

「? ? 「おお。起きたかい?」

「(誰だ?) はい。」

? ? 「おっと、自己紹介をしてなかつたね。私は海軍本部駐在の医療班員のアスクだよ。」

「俺は何故ここにいるの?」

ア「信じてくれ無いと思つが、本当の話なんだ。君以外の海兵らが目撃しているからね。」

「だから、なんだ。」

ア「いいかい、良く聞いてね。今日は全員集合して情報会を朝開いてたんだ。医療班も一応海兵だから、集合してたよ。それで開いてから20分位たつた時かな? 突如左の空間にヒビが入つたんだ。全員何事か! ? って騒いだんだ。そしたら、ヒビが開いたんだ。まるでチャックを開けるように。その中から君が出てきたんだ。 . . .
・ 信じられるかい?」

「そうか。俺は、そこから来たのか。」

ア「…普通、驚くでしょ。」

「本当は驚いてるや。自分でも分からぬ。なんでこんなに冷静なのが。」

ア「そうかい。」

「で、何は？」

ア「ここは海軍本部にある医療施設の一室だよ。」

「海軍本部？」

ア「海軍本部は偉大なる^{グラントライイン}航路の真ん中にある島『マリソンフォード』に建設した建物のこと。海軍総本山でもあるけどね。」

「…」

ア「ここは精銳が集まってるんだよ。」

「海軍ってなんだ？」

ア「海軍から知らないのかい？教えてあげるよ。世界政府直下の海上治安維持組織だよ。」

ア「さういえば、君の名前はなんだい？」

ア「そういえば、君の名前はなんだい？」

「俺は櫻井 海。」

ア「海君だね。もうそろそろ、情報会に戻らなければならない。君も連れてかなればならないけど良いかね?」

「ああ。」

海軍か・・・。海兵は・・・海軍兵士の省略言葉か。

そして、5分位歩いてオリス広場に着いた。

? ? 「報告しろ。」

ア「はい。名前は櫻井 海。海軍をしらないそうです。」

「(この変な人は誰だ?)」

ア「どうした?」

「いや、あの人誰かなー?って、思つてただけ。」

ア「あの方はセンゴク元帥だよ。」

「元帥? って何さ。」

ア「あれ? まったく軍隊のこととは知識無し?」

「かもな。」

セ「（困ったぞ。）」

ア「軍隊の中で一番偉い人だよ。」

「あ、そう。」

セ「（こいつは何者だ？）」

ア「あとでこいつのことは教えるからね。」

「お・・・おひ。」

セ「こっちから聞いていいか？」

「なんだ？」

ア「おい、だから敬語！」

「アスク、俺は敬語が苦手なんだよ。」

ア「間違つてでも言つた方が良いと想つが？」

「多分、言つた事無いから無理。」

ア「言つた事も無いのかい？」

「そうだよ。」

セ「聞いてるか？」

「聞いている。」

セ「何故、海軍を知らない？」

ア「（それ、私も聞いたかった。）」

「俺が居た所は、軍隊なんか関係無かった。てか、軍隊すらない。」

セ「軍隊が無いだと…？」

「てか、俺が見えるのか？」

セ「何を言つてこる？」

「ちよつと待つてひ。」

そつ言つて、刀を収納する。すると由て隊長服が黒に、黒い死霸装の上が白いTシャツに、下が薄水色のジーパンに変わった。

セ「何だー今のはー…？」

「今の格好が見えるのは当たり前。さっきの格好は普通、見えない。」

「

セ「何故だ。」

「違う世界に来た影響かもな。」

セ「違う…・・・世界だと…？」

「だから、言つたじやねえか。俺の居た国は軍隊なんて存在しない。代わりに自衛隊が存在する。自衛隊については質問するな。」

セ「・・・だが、何故普通の人ヒトが見えないのだ？」

「さつきの格好は、
“死神”の格好だ。」

全圖

ア「（“死神”！？）」

「黒い死霸装を着て斬魄刀を持つ人をそう言う。別に無差別に殺す」というお前らの思想とは全然違う。」

セ「死神は何をする。」

「俺らは悪霊・虚の退治者だ。」
ホロウ

セ「虚
?」
赤口ウ

「大体巨体だな。あれが普通サイズだからな。」

そこで、快速船を指す

セ「!?.?.?.まさか!?」

ア「（情報と一致してゐ?）」

「分かつたか？死神は護廷十三番隊に所属している。」

セ「じゃあ、貴様は？」

「一番隊～十二番隊まであるが、俺は零番隊だ。一人のみだ。」

セ「何故、隊が違う。」

「一番隊の隊長が一番強いよくなってるんけど、俺、そいつ・・・山じいより強いからそうなつた。山じいより経験は少ないけどな。死神の寿命でどのくらいなのかな？山じいはもう千年生きてるけど。俺は二十五年。」

セ「一？」

ア「千年！？」

「やうだよ。死神はまだ生きる。」

セ「そうか。だいたいの事は分かつた。そこの列に並んでいれば良い。情報会を再開する。」

だいたいの事は分かつてもうえたかな？

1 あれ? なぜですか? (後書き)

どうじょつか。ボートとしてたり黙こついた。

感想等、お待ちしています。

2 主人公設定とオリキャラ設定

＝主人公＝

【名前】
櫻井 海さくらい かい

【職業】

トリップ前：死神
護廷十三番隊の特別部隊、通称“零番隊”所属。零番隊隊長。

トリップ後：海兵
海軍本部の海兵。

【年齢】

見た目：14歳
実際：25歳

【戦い方】

トリップ前：鬼道と（白打と）斬魄刀一刀流
トリップ後：鬼道と斬魄刀一・二・三刀流と霸氣

【斬魄刀】 〔青龍〕せいりゅう

主に水関係の能力を持つ。

【銀虎】
ぎんこ

主に電気系の能力を持つ。

【黒鷹】
くろたか

主に闇系の能力を持つ。

この三本はそれぞれ伝説級の斬魄刀と言われている。その三本を同時に持つ者は最強の死神になると言われているが、海が持つまで信じる者は居なかつた。これも、海が零番隊に入ったきっかけ。

【降魔剣】

別名“俱利伽羅”と呼ばれる、不思議な刀。

【白鳳凰】
はくほう

刀を抜けば封印されている白い炎が開放され、白い炎を纏いながら戦う。

降魔剣には珍しい治癒能力と火系の能力を持つ。

【零番隊】

隊が着いているが、入ってるのは海一人のみ。入れるのは、山本元柳斎重国もと“山じい”こと一番隊長より実力があり、中央四六十室にも認められないと入れないと最強部隊。

隊花：“オリーブ” 花言葉：“平和”

【霸氣】

特殊な“霸神の霸氣”

【その他】

- ・生まれつき特殊能力と不思議な体質を持つ。それはゼウスの実の息子であるため。
- ・潜水能力が高い。
- ・資格が大好きで合格した数が100を超えている。

【弱点】

- ・気温が40度越えした日。
- ・参謀系

＝オリキヤラ＝

【名前】

アスク

【職業】

海軍本部准将兼本部駐在医療班員。

【能力】

悪魔の実の能力者では無い。

【霸氣】

見聞色と武装色が特化していく、戦闘に向いている。

【その他】

- ・六式の使い手
- ・ドレークとは仲が良い。
- ・次期医療班長
- ・来月に少将に昇格する事が決まっている。

＝世界観＝

原作通りの大賊時代。違つのは、ホロウ虚が存在するのみ。

（後、海が居るだけ。）

とりあえず、こんな感じです。まだまだ本編でオリキャラがバンバン出できます。

2 主人公設定とオリキャラ設定（後書き）

アスクの職業の所、漢字だけだから、読みにくい！？
次回は主人公が疑問を持ちます。

3 なんでまた事情聴取をしなければならない

＝オリス広場＝

セ「情報会を再開する。次！」

？？「はつ！！^{イストラブル}東の海で、魚人海賊団を発見。」

「なあ、アイツ誰？」

ア「ああ、あいつはライン。海軍本部准将だよ。」

「へ～。じゃ、魚人は？」

ア「なんて説明すれば・・・まあ、生まれつき人間の腕力の10倍の力を持つてる種族かな？あと肌の色が違うのと水かきがついることかな？ほとんどの魚人とが人魚は魚人島に居るよ。」

「ほえ～、ここはいろんな種族がいるんだな。」

ア「ああ。ん？」

「どうした？」

ア「あの、元帥。なんですか？」

セ「・・・・少し、声を小さく出来ないのか？」

ア「あー、無理です。」

セ「まあ、良い。」これで、情報会は終了だ。だが、まだ集会は終わらない。」

「えー？ 終わっちゃったのー？」

ア「つるせこ。」

ガ「何故じや、センゴク。」

セ「死神の情報がそんなに無いだろ。」

ガ「なるほど。」

セ「分かつたか？ 聞くぞ。」

「…………。」

なんか違くね？さつき“だいたい分かつた”って言ってたぞ？

ア「返事くらいしろよー！」バシッ

「イテーよ、つたぐ。」

セ「……」ホン。気になつてるのは沢山ある。順番に聞いていく
が良いか？

「わつ、良いよ。どんどん質問して來い。」

セ「まず、斬魄刀から。」

「斬魄刀は死神か死神代行しか持てない。斬魄刀を選ぶ事も出来ない。斬魄刀が持ち主を選ぶんだ。」

モ「ちょっと、待った。」

「？」

モ「ああ、私はモモンガ。海軍本部中将をやつてる。よろしくな。」

「おう、よろしく。で、質問は？」

モ「斬魄刀って本当に存在するのか？」

「さっきの刀が斬魄刀だけだ。」

モ「そうか、“伝説の刀”って、呼ばれる斬魄刀は存在したのか。」

「降魔剣も在るぞ？別名“俱利伽羅”」

ア「え？あれも在るの？」

「おう。まあ、それは後で。」

セ「順番と言つたが2つしかない。次で最後だ。『虚^{ホロウ}』についてだ。」

「虚か。」

セ「そうだ。」

「虚は、現世を荒らす悪靈。その正体は何らかでの理由で落ちた人間の魂。人間の魂魄が主食で、生きた人間を襲つては死に至らしめる。と言つ生き物みたいな奴。」

ア「どんな奴だよ・・・・。海賊より悪じやねえか。」

「かもな。」

ア「特徴とかは?」

「特徴は、ある例外を除いて白い骸骨のような仮面を付けている奴。仮面は心を失った本能を隠す為だとか。」

ア「へえ。」

「あ、ちょっと待つて。虚について一気に話すからメモしたい奴はしといた方が良いと思うよ?」

そう言つたら、ほとんどの海兵・記者がメモを取り出す。まあ、記者は妙な貝?を取り出したけど。あれって、ボタンがあるんだね。始めて見た。

「大きさはいろいろ。小さいほど知能が高く、強い。逆に大きいほど知能は獸と同じくらい。・・・・・・」

まあ、ここは省略する。長いから。

（12分後）

「分かつた?」

セ「ああ。だいぶ分かつた。それで言いたいことがある。」

「？」

なんだ？

セ「アスク。お前が言え。」

ア「はい。海。さっきの虚はこの世界にいるんだ。」

「！？」

なんで！？

ア「今日からひょつと二ヶ月前だな。虚がこの世界に来たのは。」

「……（マジでーへビツツって来た！？）」

ア「その虚がこの世界で暴れてる。多大な損害を生んでいるのはその“虚”だ。」

「損害ついで、島を荒らしたりとか？海賊よりも多い？」

ア「そうだな。両方とも合っている。」

「そうか。なんか俺がここに来た理由がなんとなく分かつたようだ。」

ア「……。？」

「ん？あーあれか。」

ア「黒揚羽？」

オ「ん……………。」

モ「おい、それを見るな。」

「？」

モ「いいつはクモクモの実を食べた蜘蛛人間なんだ。」

「へー。蜘蛛人間な。世界は広いなー。」

ちょっと待った。蜘蛛人間ってスパイダーマンじゃねえの？だつて
そうだろ？へーじゃあ、あいつは指先から糸が出たりしてwww。
(笑)

ア「あ、止まつた。」

「地獄蝶だよ。ん？」

『話したい事がある。そここの世界の事だ。』

「山じい？」

『そつじや、お主、今違つ世界に居るじやろ？』

「今、こここの世界に虚が暴れてるって聞いた。“その虚を全て退治

せよ”だろ?「

『その通りじゃ。できるかの?』

「相当な・・・・膨大な時間が掛かるけどな。それでも良いか?」

『OKじゃ。すまないの。こんなに大仕事を押し付けて。』

「俺は零番隊長だ。元々大仕事しか来ない所だからな。」

『本当にすまない。』

「ああ、俺は任務を必ず終了させます。」

『ふむ。頼んだぞ、“櫻井隊長殿”。』。

「了解。」

通話が終わると、地獄蝶は舞い上がった。

「アスク。」

ア「ん?どうした。」

「俺、海軍入るよ。」

セ「…?」

ア「…?“きなりどうした…?」

「俺、ここに来た理由が分かった。こここの世界で暴れている虚を全て排除する事が仕事だった。元々大仕事しか来ない部隊だからな。少し慣れてる。」

ア「そうなんだ。」

モ「全て排除は難しいぞ。」

「でも、仕事なんだよ。隊首会がある時以外はこここの世界で任務を終わらせなければならない。ただ、どこの組織に入つても良し。と言つ条件もあるからさ。しかも、こここの世界の事もよく知らないから。で、海軍に入ろうつかと。」

ア「私は賛成だ。」

モ「私もだ。」

セ「ふむ。海軍本部の士官学校に1年通つて貰つてから正式な海兵にする。それで良いか?」

「OK。」

これで、明日から士官学校に通つ日が始まる。

3 なんでまた事情聴取をしなければならない（後書き）

はい。とりあえず、仕事が決まりました。
次回から、「士官学校編」が始まります。

4 鍛錬場～破道確認～

“士官学校の教室”

先「はい。今日入学した、昨日いきなり現れて有名人の櫻井 海君です。」

おいおい、小学校の先生かよ。おい！

先「櫻井君は「君付けなくて良い。」櫻井は、任務でこここの世界に来るので、居ない時があります。それでは、真ん中の席へ。」

君付けは気持ち悪い。

後、この席順は毎日変わるらしい。一番前の一番左が一番成績が良い学生だ。

しかし、今日は4月8日。ちょうど、学生達が一学年上がる日なのだ。その時は席順は関係無い。後、このクラスは成績優秀の人しか入れない。

ちなみに席はこうなっている（日常）

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	

今日の席は11番だ。

今日からほとんどの日は、全て体力作り。（勉強する事がほとんど

無いため。）

？？「ねえ、ねえ。櫻井）。」

「誰だ。」

？？「僕は、ファール。」

ファールつて、おい。

ファ「よろしくね。櫻井君。」

「海で良い。ファールつて呼んで良いか？」

ファ「うんー。よろしくー。」

「おひ。」

ファ「ほら、ほら、早くしないとー。成績が下がるよー。」

「後で行くから。」

俺には瞬歩があるからな。瞬歩の速さは夜一と回りくまでも有るんだが、だからな。

ファ「えー。行こうー。」

「分かった。」

ファ「ーーー。ヤバイよー！あと2分しかないよー。」

「捕まつてろ。」

「フア 「え！？」

「良いから。」

死神の格好にもならずに瞬歩が出来るようになつたから楽だ。

ガシツ

「行くぞ。 “瞬歩” シュンツ

『大鍛錬場』

先 「遅いな。 櫻井とフアール。」

シュンツ、スタッツ。

フア 「おおーギリギリセーフ！」

「間に合つた。」

モ 「ー？」

「あ、モモンガ発見。」

モ 「今は駄目だぞ。 鍛錬だからな。」

「あ、そつか。 でも、無理だ。」

モ「・・・」

周りを見ると、（元帥と三大将と参謀と拳骨を除いた）海軍上層部と少将数名と准将数名とクラスメイトが待っていた。

先「櫻井は知らないか。俺は本部大佐だ。」

「あ、大佐だつたんだー。」

先「そうだ。」

この人、大佐らしい。

先「今から、何を鍛えても良い。六式を使いたいなら六式を、剣術を磨きたいなら剣を使つてる将校に頼め。俺に頼んでもいいぞ。櫻井は自分で鍛えたいなら、自分でな。以上！」

すると、学生達が将校に頼んで行く。

ファ「なあ！ 海は？」

「ファールはどうするんだ？」

ファ「僕は六式だよ。アスク准将に頼もうかな？ つて・・・あ、取られた。」

「ドーベルマン中将とかは？」

ファ 「それだー！じゃー！僕行つてくんなー。」

「おひー。」

俺は自分でやらないとな・・・。

先 「ん？ 櫻井は自分でか？」

「そりだが？」

先 「頼めば良いだろ？」

「俺の斬魄刀を使うとき靈圧が高いことが多い。」

先 「ふむ、そうか。じゃあ、頑張れ。」

「おひー。」

「どうじよつ。鬼道でも鍛えようかな？ 最近なかなかやつてないからな。」

誰も居ない所でやう。」

「よし、ここには人は居ないな。」

ここで鬼道の威力を確かめよう。

モ 「（何をするつもりだ？）」

ファ 「はあー。」

ドー「あまい！もつと、早く走れ！」

ファールは只今、“剃”に挑戦中。

「破道の四、白雷！！」

指先から一條の雷を無事に放つ事に成功。威力もある。壁に焦げ跡ができたけど・・・。

ファ「！？何アレ！？」

んー、物質・・・あ！砲弾発見！

ガラガラ

ガ「おい！死神！その砲弾を・・・？」

「破道の十一、綴雷電！！」

砲弾に沿つて、電撃を放つた。これも成功。

ガ「！？」

砲弾は無事。まだ使うかもなー。そのままにしよう。

ガ「なんじや・・・今のは・・・。」

次は伏火か。これは大丈夫だからな。うーん。この砲弾をなんとかしたい・・・あ、あれがあつた。

「破道の五十四、廢炎！！」

円盤状の炎を放ち、砲弾を焼き尽くした。

「ん？ 野次馬？」

「アーネスト・アーネスト」

「あ、
フアール」

「アーヴィー、剃り習得したよ！今、嵐脚に挑戦してるよ。」

一
頑張れ、
フアール

フアーーああ！」

よし。
鬼道はこれができればもう大丈夫だ。

次は・・・なんでもいいからとにかく確認しなければ

4 鍛錬場～破道確認～（後書き）

次回も確認です。なんの確認かは次回で。

5 斬魄刀の威力確認

「・・・・・。縛道は相手が居ないと無理だし。まあ、良いか。応用系を確認するか。」

応用つて、まあ、なんとなく。乱菊が言つてた。

あとで、物凄く尊敬の視線を感じるんだけど・・・野次馬とかクラスマイトとか。

「なんだ。」

気になるのが、なんで俺こんなに冷静なんだよ。多重人格みたいだな、おい。

フア「なんか尊敬しちゃう。」

? ? 「櫻井すゞ」ウイーーね！俺、ニロドーーす！ー！」

居るんだ、ここにも、チャラ男が。

二「死神なんだよねー。」

「ああ。お前は・・刀？」

二「そりゃ多分、強い方だぜー？学生の中で。」

「ま、」

「『手合わせしないか?』

「いや、やめたまつが身の為だ。」

「何でだよ。」

「後で、斬魄刀の威力確認するから。今は違ひなど。」

「分かつた!」

よし、チャラ男が離れたから確認しよう。

で、斬魄刀をぬ・・・・あ、ここでやりたくないな。海に向けて放ちたいな。下手すると鍛錬場が消滅しちゃうー。

ア「それじゃあ、港へ行くか?」

「?声に出てたか?」

ア「まあな。」

「港に行く。」

フア「僕、斬魄刀見たい!」

二
「俺もだ！」

「はあ、見たい奴は遠くから見てろ。近くても半径40m近づくな。
先に行く。 “瞬歩”」

シンロード

モ
剃では無いもんだが・・・

フアー よし！早速！“弟”

二 ああ！ ノア＝川！ “弟”

アーリーは意外と優秀です。

II 軍港 II

ふう。着いた。ちなみに今は死神の格好になつてゐる。

本物――――――――――――――――――――

モー本當に在つたみたいだな。

なんかやりにくいな。まあ、約束は守つてるから良いか。

「今から斬魄刀とは関係ないことをするから。」

うん、この一つは関係無い。

ちょっと待って、最初のやつにくらい。なんで青雉とかいるの！？で
か、上層部全員集合しちゃったよ。政府と海軍の。五老星居るし！
これは昨日アスクから教えて貰った。

「破道、氷牙征嵐！！」

海に向かって冷氣の渦を放つ。

ピキイー——————ン——————！

全員「——」凍つたあ——————！」

青雉「あらりら？」「の子何なの？」

ここつウザイ。

まず、銀虎を抜く。刀先を凍つた海に向け、

「破道、金剛爆！！」

ジユワ——————

全員「——」溶けたああああ——————！」

先から大型の火球を放ちました。（笑）

思つたけど、鬼道だけでこの世界のほとんどの人に勝ちそうだな（

(笑)

フア 「・・・・・」 (驚)

「今から斬魄刀の出番だよ。」

始解はしなくて良いか。

「まずは銀虎！・・・雷砲！」
ラコボウ
レイボウ

文字通り、一振りし、その斬撃が雷の砲弾になり、出てきた海王類を襲う。

ギヤアアアアー！ー！

「悲鳴上げてる・・・。」

フア 「！？」

二 「斬撃が形を変えた！？」

そういう技だし。もうちょっと披露しますか。
お？ちゅうじ海王類がバンバン出てきた！良い的発見！

「大雷」
オオボウ

縦に振つて出てきた斬撃が雷に変わり、大型海王類を4匹直撃。

「真つ二つだ・・」

毛公鼎

「あー俺、三本の斬魄刀に選ばれたから。どれも斬魄刀の中でも伝説級の。」

モ「伝説の伝説！？」

「そんな感じ。」

「次は青龍。・・・・・水蛇！」

水の蛇。相手に向かつて空間を泳ぐ。

「次は黒鷹。・・・・・黒穴！！」

突如、海王類の真下にブラックホールできた。まあ、斬撃が海中を通してそこにできたものだけど。ブラックホールだから、海王類が吸い込まれていく。うん。奇妙な光景だな。

あまり使いたくないなー。でも、使う。矛盾してるな。

斬魄刀を納刀する。

「「「」」」りや、勝てないな・・・。」

モ「そりやそうだ。」

「ふう。そうだ、白鳳凰も一つやるつか。」

何にしよう。・・・・あ、技はゾロとかと一緒に事がが多いから。

「一刀流、ひりゅう飛竜火縄！」

はい、ゾロと同じ技です。

「確認終了。ん～～つ、はあ。とりあえず休憩。」

5 斬魄刀の威力確認（後書き）

技が・・・普通。（笑）
しつかし、疲れた・・。

次回は決まってないね。学校で考えてきます・・。

翌日

フア—海———

なんたよ
ふあ

港はまだ生き物がいるんだよ!! 四方の!!

一 まざかな

まさか、虚じやねえよな！？俺はしーも死神の格好にしてる

いつでも出撃出来る様に。

「ちょっと行つて来るー！“瞬歩”！！」シユンツ

「ああ！！！行っちゃつた！！追わなきや！」

軍港

海兵「なんだよ、」の生き物・・・・。ヒイー！」

？？「オイシソウダナ・・・。」

海兵「ど、どっか行け！」

？？「クワセロ・・・。」

海兵「・・・・ガタガタ

シユンツ、スタッツ。

まづい！海兵がやられる！

ザシユツ・・・・ス――――

危ねー。虚を斬り遅れたら二つ死んでたな。

「大丈夫か？」

海兵「・・・。」

「あーあ。失神してるし。」

まあ、しょうがないな。

「アーネスト、お前は？」

アーティスト大丈夫か！？

「あ、アスク。ちようじ戻しに来た。」の海兵よりしく。

ア「こいつ・・・失神してる。」

「虚に襲われそうになつて、失神した。虚は斬つておいたから大丈夫。これから忙しくなりそうだ。」

ア「そうだな。」

「え!?」にも出たの!?

ପ୍ରକାଶକ

「お前、軍学生だなうが。」（苦笑）

「これは、無理——！——！——！——！」

だろうな。いくらなんでも一般は無理だろう。

「ねえ！報告書とか書くの？」

「当たり前だ。」

「 フア 「ええーーー？」

「でも、書く」とは少ないからな。」

「 フア 「そつなんだーーー。」

「 ああ。戻るぞ。」

「 フア 「ああーーー待つでよーーー。」

『 教室 =

先「今日の朝にホロウを発見し櫻井が対処してくれましたが、緊張
は無くなりません。」

二「え、じゃあ。海は？」

二口は席順番号は3番。

ガラガラ

「 フア 「遅くなりました。」

「 フアールは席に着く。ちなみに番号は2番。」

ガラガラ

「アスクの所に居ました。」

先「『』苦労様です。」

「どうも。」

フア「海ー海は一番だよー！」

「ああ。」

どひやー、一番のようだ。

先「1番の櫻井 海。2番のラックス・ファール。3番のレオ・ニ
ッコ。以上3人は一年間番号は変わる事は無い。実力が分かった。昨
日、海軍上層部と政府上層部が会議で決めた事だ。」

? ? 「すつげーなー！」

「？」

誰だ？

? ? 「俺はオリック。ラニー・ヨ・オリック。今の番号は六番ーよろ
しくなー！」

「よろしく。」

こいつは、最も外国人っぽい名前をしてるな。

先「櫻井は今日・・・今から、海軍本部の上層階へ行け。そこの階段で案内の海兵がいるはずだ。そいつに着いて行け。今日は海は仕事のみだ。」

「分かった。」

早速、行こう。

6 iRIの世界に来て初めての虚退治（後書き）

次回は仕事です。

7 総帥と対面

＝階段＝

階段を上り始めてからどのくらいの時間が経つただろうか・・・・・。

海兵「あー。」

「・・・・・」

海兵「氣づいてくださいー。」

後ろ？

「・・・・朝、虚に襲われそうになつた海兵か？」

海兵「はいー助けてくれてありがとうございますー。」

「まあ仕事だからな。」

海兵「もしかして、上層部に会つんですか？」

「そうだが。まさか、お前が案内役か？」

海兵「はいー！僕ですー！付いて来て下さい。」

「ああ。」

しばらく歩いて、大きな扉の前に付いた。

海兵「ここです！では！今日はありがとうございました！」

「ああ。じゃあな！」

・・・・・前言撤回。扉じやなくて、襖ふすまだつた。

・・・・・ってか、大きすぎるだろ。なんだよこの大きさは・・・。巨人族が居るから納得できるけど、よくこんな大きい襖をあけられるよなー。まあ、こここの世界の人間つて大きい・・・人間じやなくて、もう生き物全体がデカイか。ここは弱肉強食の世界だな。

「よつ！」

ススス――――――

ビビ――――――ん！――――

「・・・・・」（汗）

なんでここのなに面のー。全員集まる必要あるのかー—————.
—————.

どんだけ、重要な会議をやつてたんだよ—————。俺らみたい
だけど————。

これ、絶対に昨日のままだよね？

セ「遅かったな。」

「…………すっとこのままだつただろ？」

絶対にそうだ。

セ「そうだ。」

「ソリで寝てたのか？」

「べつなんでも、それは無いだろ。

セ「そうだ。」

「…………何やってんだよ。」

サ「つむれこなれのー。」

「お誰だよ。」

サ「わしゃあ、サカズキじやー！大将じやあー！」

「怒る事は無いと思うが？」

サ「うるさいけえのー！」

「はいはい。・・・・・・はあ。」

ここは、大丈夫だろうか。身の安全を大切にしないとな。

セ「そこの席だ。」

ここか。

セ「ふむ。」

? ? 「センゴク、ちょっと良いか？」

セ「コングさんどうぞ。」

コソ「おれは、世界政府総帥のコングだ。」

「俺も名乗った方が良いか？」

コソ「そうだな。政府の人間は知らん。」

「俺は、護廷十三番隊特別部隊通称“零番隊”的隊長、櫻井 海だ。」

「

「ン」「零番隊って事は普通の隊より強いって事が?」

「やつだ。零番隊はまだ一人しか居ない。」

「ン」「お前だけか。」

「ああ。」

「ン」「まあ、お前の威力確認だつたか?それを見たが・・・強すぎないか?」

「あれは基本だが?」

「ン」「!?.あれで基本つていいつもりか!?!?」

コングはバンッっと机を叩き怒鳴る。

「だから、さつきので察してくれ。俺は零番隊隊長だ。」

「ン」「隊長がどついた!」

セ「何故、そんなに落ち着いてられるのだ?」

サ「覇氣が出てるひめーに。」

なんか言つてるし。

「零番隊だ!」

「……『それがどうした！』

「零番隊だから、それくらいの強さが無いと勤まらないんだよ……！分かつたか！？」

あ……怒鳴っちゃった。

「……すまない。」

「いや……。」

「……『氣にしないでくれ。だが、今は本当にすまなかつた。』

「……。」

なんか、『氣まずいぞ……』『OK氣……。』

7 総帥と対面（後書き）

終わり方があああ・・・・・おれぞ。

8 今後について

沈黙が続く。

「…………」

その沈黙を破つたのは、

セ「コングさん…………」

センゴクだった。

コゾ「ああ。」

セ「櫻井。今後について話す。」

「今後？一年後の事か？」

セ「そうだ。」

「一年後は俺は海兵。階級か？」

セ「察しの通りだ。櫻井の階級についてだが、卒業したら少尉から初めて貰いつ。」

「何でだ？俺は一番だからか？」

セ「そうだ。だが歴代の一一番だった海兵はここにも居るが、少尉か

らは始まらない。皆、曹長からだ。何故、少尉から始まるか。それは、櫻井の実力を見て私達で決めた事だ。」

「まあ、俺は拒否しないけど、拒否権は無いんだろう?」

セ「そうだ。それでだな、この一ヶ月間どうするんだ?」

「そりゃあ、仕事だろ。」

セ「そうか。見ることとは?」

「さあな。」

セ「…………まあ、いい。もう用は無い。」

「やうか。じゃあ、俺は戻る。」

ガチャ・・・・・バタン

ふう。教室もど・・・・・あ、もつ終わってる。

食堂行こうかな?

= 倉庫 =

賑やかな食堂で飯を受け取る。

ファ「あ！海！」

ファールの向かい側に座る。

「 よお。 なあ、 お前つて卒業後の階級つて決まつてるか？」

— — — — —

いきなり静かになつた食堂。

「アーティスト」

ざわざわ

「決まってるけど。」

— — — — — h

再び静かになる食堂

トントン

調理の音しか聞えない。

「「おれも決まってるよー。」

トントン

あれ?止まつた?

トントン

「階級は?」

なんか海兵らが止まつてるぜ?なんでだ?

フア「軍曹かい。」

トントン・・・トントン

一回止まつたぞ?

「俺も軍曹から。海は曹長からだろ?」

トントン

「いや、俺は実力を買われて“少尉”かい。」

・・・・・・・・・・

あ？確実に止まつたぞ？

全員「…………」「少尉」からああああああああ…………？？？？？

「よくハモるなあ」こは。

二三九

「え!? マジ! ?」

「だつてさりとて言われたもん。」

ヘルメッホさん、あの人凄いですよ。

へ一聞いたシわかるたゞ二ヒリ しかも備達も見たかシな

二 なんが憧れですか？

八
まわる

アーヘえ。“少尉”からか。頑張れよ？」

一
あ
み
「

ア「そりゃあ所屬部隊は？」

「あー、中将以下を希望したよ。毎年変わるらしい。まあ、変わら

ない事もありそうだけど。抽選だから。それで、今日ここでも……。
あ、来た。」

ア「おお。抽選箱だな！」

「ここから引くようだ。」

オ「この中に紙が入ってる。初回は、中将11名だが、ラクロワとかも入れて欲しいと言つてたが……良いか?」

「?」

オ「巨人族だ。」

「別に良いよ?」

オ「そうか。」

「……となると? 1~3名か?」

ガサガサ

オニーグモが抽選紙をかき混ぜてる。

オ「そうだ。この箱に手を入れて一枚だけ取れ。」

「……なあ、何でお前らまで……。」

ファ「だって、これで決まるんだよ?」

「そうだけじゃ。」

ガサガサ

ファ「とか言いながらもう手突っ込んでるじゃん!」

「まあな。これで良いか。」ヒョイ

オ「誰だつたか?」

紙を開けるとそこへ書いてあつた名前は・・・・

D a l m a t i a n

ダルメシアン中将だ。

オ「ちよつと、待つた。ヒントくれ。」

「ヒント?・・・名前に動物名が入ってる奴。」

ガーネン

入っていない中将が落ち込む。

オ「うむ。誰だ?」

「犬。」

オ「犬?」

ドー「俺か?」

ダ「いや俺だろ。」

「後者。」

「ドー・ドー・ドー。」

ダ「俺か?」

「ああ。よひじぐ。」

ダ「よひじぐ。」

ドー「あ・・・・・。」

「あはは・・・・・ドンマド。」(苦笑)

ドー「あ・・・・・。」ガクッ

あ、落ち込んだ。

ダ「フジ。」

ドー「調子乗るなよ！」

ダ「ドンマイ。」（微笑）

ドー「う・・・。」

ダルメシアン、笑ってないか？微妙に。なんか勝ち誇った顔でもあるけど。

オ「決まりだな。一年後には、ダルメシアンの専属海兵だ。」

「分かつた。」

そういえば、

「ファール！一ロード前りはめび！」？

ファ「俺はガープ中将。」

二「俺は青雉大将。」

「へへ頑張れよ。なんかそこ嫌な予感がするからな。」

ファ「え！？」

「俺の予感はほとんどの的中する。」

—「えー！？でも大丈夫だよ！！」

「なら、良いけど。」

まあ、卒業後の初回の専属上司が決まり、階級が決まった。

8 今後について（後書き）

疲れたー。

こんな感じです。

次は・・・・なんだっけ？次回は今日か明日更新。

（1時間後）

ファ「あーすー」「ねー！」

「あ、俺もビックリヤ。歴代の一一番は毎回曹長からだからな。」

「それより2つ上がったんだねー！」

「せうみたいだ。」

ガ「ファールー！一口！櫻井！」

「んあ？」

ファ「ガープ中将ー卒業後よろしくお願ひしますー！」

ガ「よろしくじゃーそれでー今から、わしら中将の部下全員集めて、超大規模鍛錬を行うのじゃが行くか？」

ファ&一「行きますー！」

ガ「そうか。なら早くいつもの場所でのー！」

ガーペはそこにに向かつていった。

それだつたんだな。他の中将達と海兵達がいつの間にか居なくなつ

てたし。

ファ 「海！俺ら先に行くからなー剃！」 シュン

二 「剃！」 シュン

あーあ。まあ、俺の方が速いし。

「瞬歩」

シュンツ

『大鍛錬場』

ここはいつもと同じ場所だが、高さが調整されていた。

シュンツ、スタッ

「ふう。」

全員 「 」「 」「 」「 」「 」 「 」「 」「 」

シュン

シユン

フア「あれー?」

ニ「えー?」

「あ、これは“瞬歩”。」

フア「なんでそんなに速いのー?」

「秘密。」

ニ「えー——————!」

「なあ、これって俺何すれば?」

ダ「いらっしゃい。」

「おひ。」

ガ「二口。フアール。いらっしゃるございやー!」

フア「はー!」

ニ「はー!」

ダ「海。って、呼んで良いか?」

「ああ。」

ダ「海。俺の部下と手合わせこむ。」

「全員でかかつて来い。まあ、すべ終わるか？」

ダ「はあ？」

「リリード面元の全員……ロヒフラーも含めてだ……全員で俺に懸かつて来い……。」

二「海？」

モ「正気か……？」

「相手してやる。勝つ自信はある。」

ダ「何言つてんだ？」

「……どんなに多くても一瞬で終わると思う。」

ダ「へえ。じゃあ、5分後に行くぞ？」

「ああ。だからでも來い。手加減は無しだ。基本で行くから」

ファ「何がしたいの？」

「限界を試したいんだ。」

フア「あ、そういう事か。」

「5分後だ。」

鬼道の限界を試したかった。俺は零番隊長。ハカラサヒト魂界では試す事はできない。限界は最初の“一”から。今から行おうとしてるのは、『ハカラサヒト縛道の一、塞』これだ。

それを今からその複数の人数に向けて行う。

（5分後）

ダ「本当に行くぞー！お前ら行くぞー！」

ウオオオオオオオオオオ！…………！

叫びながら来るなよ。五月蠅い。おお、さすがだ。剃使つてる奴も居る。

さて行きますか。

「『複数系縛道の一、塞』……」

ダ「うう……。」

モ「なんだこの金縛り……ではないが！」

二
痛い！

「なんですか、これ！」

へまつたく解けないそ

「ふう、成功。（解け）」

ダ「はあ、開放された。」

モ「はあ。」

「アーラ、やつぱり、勝てないよ。」

二
今更かよ。

「はあ、やいだあ。

へ
—
なんなんだ?
」

۱۰۷

「ああ。確かに、勝てないな。」

「ああ。ん？」

ダ「どうした？」

ل

「あ、これ虚発見のサイレン。抜けるよ。」

「ああ。どこだ？」

ダ「増えた？」

「そつだな。だが全て違つといふだ。」これは影響が無い。行つてく
る。

ダ「おお。」

シュンツ

「相変わらず速い……。」

10 シャボンティ諸島46番GRRのボスと対決

「Jリマセシャボンティ諸島。

＝46番GRR＝

46番GRRは、無法地帯。そして、海賊の集まり場所にもなっている。が・・・・・

グオオオ！！

虚も集まつてしまつよつだ。

「うひ。なんでこりんな無法地帯に。」

『クワセロ・・・・』

「ん？大群？あ、そんなに多くないな。7体。全部ここに集まつてきたか。」

『死神――――ソノタマシイクワセロ――――』

「残念。俺は他の死神と比べるなよ。」

「その衝撃は雷より竜巻よりも強し。“雷竜巻”
始解はしていない。

雷と同じくらいの電圧を縛つた竜巻が虚に襲つ。

ギャアアアアー！！！！！！ス――――ツ

「フンッ。雑魚が。」

？？「誰だ？貴様、俺の縄張りに入るとはな。いい度胸してゐるではないか。ハハハ。」

「誰だ。」

？？「俺はジャッキー。」の46番GRのボスや。」

「海賊か？」

ジ「世間では、そう言われてるが。今は元海賊でここにボスだ。」

「あんまり変わらないだろうが。」

ジ「ふん。貴様も名乗れ。」

「俺は櫻井 海。」

ジ「そうか。海。手下に入らないか？」

「断る。俺は現在海軍士官学生。来年は少尉だ。」

ジ「ほう。海軍さんか。じゃあ、相手してもうつか。」

「手下も、か？」

ジ「当たり前だ。テメヒらー！出て來い！」いつに向かって存分に暴

れろ！

ウオオオオオオオオ！――！――！――！――！――！

「うつせえな。つたく、雑魚が。」

ジ「ふん。数は多いからな。」

だいたい、200人ぐらい居る。でも海兵より少ない。簡単だ。鬼道でいいから。

『複数系鬼道、縛道の一、塞』

シ - 何!?

「俺をなめない方が良いぜ？」

ジ 貴様――――――――――おらあああ――――――

すいふんと間違つた使い方をしてるな

刀を振り回してゐる。

ジ「うるせえ！今は貴様を殺すのみ！」

「あ、お前懸賞金は?」

ジ「一億5000万だ！」

「へへ、意外と高いんだね。でも、残念お前は負ける。」

ジ「誰にだ！」

「俺に。」

ジ「やつてみるかー。」

「『縛道の九、撃』『破道の十一、綴雷電』」

まず、ジャッキーを赤い光で縛つて、綴雷電を撃つ。

ジ「うがああーーー！」

「だから、言つただろ？まあ、海軍本部に戻るからさ。連れて行くよ。」

あ、でもここひびひびひびひ。あ・・・

(青龍ー)
(なんだ。
(こいつら、海軍本部に連れて行くから、手伝つて?)
(分かつた。)

青龍が刀でもなく人でもなく龍になった。

青「これで良いか?」

「ああ。俺も乗らう。よつ。」

青「しつかり捕まれよ。」

「おお。」

角を持つ。

青「角?」

「え? 駄目?」

青「いや、駄目ではないが。(角は敏感なんだよ。海。)」

「行け。」

青「お、おひ。」

『海軍本部』

海軍本部に無事に着いた。

兵「なんじや」「つやああああ……。」

「青龍。いつもは斬魄刀だが。おい、戻れ。」

シユルルル

青龍が元の形になる。

兵「なつーそじつは・・・・。」

フア「あー戻つて来たあー！」

「フアール、五円蠅い。」

フア「ええー? 酷つーー。」

「ジャッキー。懸賞金2億5000万B。シャボンディ諸島の46番GRのボスらしー。他の奴らはその手下だ。」

二「ええー? 学生なのに億越え捕まえつけられたのー?」

「お前りこひこひりむせべ。」

フア「あ、いめん。」

しかし、どうやって懸賞金決めてんだ。どちらめではないのか? アスクにでも聞いてみるか。

10 シャボンティ諸島46番GRのボスと対決（後書き）

まあ、簡単に判決がききましたー。

11 残り1ヶ月にサバイバル競争修学旅行決定

「こ」は医療施設。

「アスク～居るか～？」

ア「大声出すな。こ」は医療施設だぞ？」

そうだった。こ」は医療施設だったね。てかさつき自分で言つてた・

・・（笑）

ア「で、なんだ？」

「医療とまつたく関係ないけど、懸賞金ひとつ決めてるの？」

ア「え？ なんでそんなことをいきなり？」

「今日さ、『剣振り』のジャッキー捕まえたんだよ。で、あまりにも弱かつたからさ。」

ア「（そんなに弱くないけどな）報告書で決まるよ。」

報告書かよ。基準無いじゃねえか。

「でも、最終的には？」

ア「最終的には会議だな。だから大海賊時代になつてから会議が増えてる。」

「へへ、でも実際でたらめだと思う。なんでコイツがこんなに高い

んだ?つていつのがたまにあるじ。」

ア「たしかに。」

「まあ、ありがと!」

ア「ああ。(海が報告書書いたら懸賞金は上がりこくへくなるな。)」

それから約1ヶ月。現在3月。

そして、先生から発表があり、

「今日から1ヶ月サバイバル競争修学旅行を行います。ペアを組んでも組まなくとも良いけどこれは、組んだ場合結果を人数で割る事になるので組まない事を薦めます。この結果は卒業後の階級に影響が出ます。仮で決まってる3人も上下するかもしれない氣をつけるように。以上!それでは開始!」

・・・・・・・どうやら「」の「」の内容のようだ。正直
言ってつまんねー。

フア「海?行かないの?」

「あ？あ、お前はどこ行くの？」

ファ 「え？ローグタウン。一口と偶然一緒にたけど？」

「俺は…………なんなんだよ……」

周りが二つばかり見てるんだけど……。

先 「どこに行くんだい？」

「シャボンディ諸島。そこの方が暇じゃないと思つて。虚も集まり易いから。」

ファ 「そんな理由なんだね。」

「ああ、俺はもう行くから。」

ファ 「うんーじゃあねー。」

「ああ。」

シュンツ

ファ 「え？普通瞬歩で行く？？？」

1.1 残り1ヶ月にサバイバル競争修学旅行決定（後書き）

「めんなさいー！短すぎましたあ————！！！
次回は今日更新するようにしますので————！！！
見捨てないで————！！！あ————！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503y/>

大海賊時代に来た死神

2011年11月21日13時33分発行